

CNAC 第 19 回全国フォーラム in 横浜 「楽しさがつなぐハマの海の未来」

日時:令和 6 年 11 月 16 日(土) 13:00~17:00

場所:横浜市開港記念会館 2 階 6 号室

主催:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 (CNAC)

後援:国土交通省、横浜市港湾局、一般財団法人みなと総合研究財団 (WAVE)

■開会の挨拶

スピーカー:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好 利和

本日はお忙しい中全国フォーラムにご参加いただきありがとうございます。

CNAC、海に学ぶ体験活動協議会は、設立から 19 年ほどを迎えています。

ご存じのとおり、日本は海に囲まれており、その海でいろいろな体験活動をして、子供だけでなく大人もいろいろな学びができる場を普及したいと考えて活動しています。

1 年前、第 18 回は大阪湾の阪南市で全国フォーラムを開催しました。阪南市は、市として海洋教育に熱心に取り組んでおり、CNAC と今年度協定も結び、支援をすることになっています。学校教育の中で海辺の体験活動を取り入れているエリアとして、いろいろと事例報告をしていただいた。

全国に、いろいろな海があるが、それぞれ特徴ある取り組みを各地でされており、全国フォーラムも様々な地域で実施しています。

今回テーマを「楽しさがつなぐハマの海の未来」としているが、横浜のハマだけでなく、海辺のハマとして、神奈川県、湘南で活動されている方にもご報告をいただくことになりました。それぞれの活動について、共有し、また、皆様からいろいろなご意見をいただいて、今後の活動に生かしていきたいと考えています。

先月、能登に行きましたが、元旦に大きな地震があり、半島での震災は今まで日本ではありませんでした。救助の手が通常 3 日で行けるところを 5 日かかったのが大きな問題ということを知りました。周りが海で囲まれているが、残念ながら地形的に海からの救助はできなかつた。その中で地元の人々はいまだに暮らしている。日頃、海の活動をしているものとして、できる限り支援をしていきたい、と思っております。

今日は横浜の地でいろいろな情報提供の場としたいと考えています。お楽しみください。



■来賓挨拶

スピーカー:国土交通省 関東地方整備局 港湾空港部 部長 内藤孝様

本日は、CNAC の第 19 回全国フォーラムが「楽しさがつなぐハマの海の未来」というテーマで、ここ横浜において開催されること心よりお喜び申し上げます。

皆様には日頃より国土交通行政、とりわけ港湾行政に格別のご理解・ご協力をいただきお礼申し上げます。

我々が、島国日本で海に囲まれて暮らす中です、海は宝物で、物流の拠点であり、賑わいを生み出す場であり、また、環境は我々に豊かさを与えてくれる。そういった場を我々は大切にしていけないといけません。

人々が海の魅力をしっかりと感じ、その環境への理解を深め、環境を保全・創出していくことは、我々の明るい未来にとって非常に大切な取り組みだと思えます。

そういった意味で、CNAC の取り組みは我々の未来に向けても非常に大切な役割を果たしていると言えます。

我々関東地方整備局でも海辺の自然体験ということで様々な取り組みを進めています。

市民団体・民間団体と一緒に、海辺での自然体験を通じてアマモ場の再生を図る「東京湾 UMI プロジェクト」を進めていますし、また、横浜港湾空港技術調査事務所の敷地内で人工干潟を設けて、地域の住民・子どもたちと一緒に、生物の環境などを勉強する場も設けています。

横浜港のみなとみらい、臨港パークの前面でワカメの育成を通じて海域環境の大切さを学ぶ「夢ワカメワークショップ」といった取り組みなども進めており、本日参加されている皆様の中にも、そういった我々の取組を先導していただいたり、積極的に参加していただいたりしている方がいらっしゃいます。いろいろな場で、大いなる力を皆様にいただいていることを改めて感謝申し上げます。



私も本日のフォーラムでの皆様からの発表も楽しみに参りました。本日のフォーラムが情報共有の場となり、皆様の活動をますます活性化し、いろいろな輪が広がっていく機会となればと思っております。

今後も CNAC の関係者の皆様の取組をはじめ、全国の海辺の自然体験の取り組みがますます発展し、子どもたちの明るい未来へつながっていくことを祈念して私の挨拶としたい。

スピーカー：一般財団法人みなと総合研究財団 専務理事 小池慎一郎様

本日は、CNAC 第 19 回全国フォーラムの開催誠にありがとうございます。

また、ご存じのとおり、みなと総研は CNAC の事務局も務めております。皆さまに日頃大変お世話になっておりますことをこの場を借りてお礼申し上げます。

私事だが 13 年ほど前、港湾局の環境室長の立場で CNAC に関わらせていただいた。ちょうど大震災があり、海に対する国民の皆さんの感情が揺れ動く時期で、CNAC の皆さんがどのように海の活動を続けていけばいいか、とても悩まされていた時期だったと記憶している。

その後も、感染症の流行などもあり大変だったと思うが、活動を継続されてきたことに対して敬意を表したい。

活動を取り巻く最近の環境として、温暖化に関することでブルーカーボンであったり、環境問題がクローズアップされている。資料を予め拝見したが、そのようなテーマも含まれており、皆さまの発表を非常に楽しみにしている。

最後になるが、今日のフォーラムが皆様にとって有意義な時間になるよう祈念して挨拶としたい。



■情報提供① 「横浜市内小学校での釣り環境学習の取り組み～みなとは子供たちのサイコーのフィールド!～」

講師：(公財)日本釣振興会 事務局次長／ハマの海を想う会代表 吉野生也様

元幸ヶ谷小学校校長 高根順様

1) 子供たちを取り巻く環境

- ・ 横浜の街の中にある学校に子供が通っていた。横浜はみなとまちだが、子どもたちが遊べるフィールドが意外と少ないと感じていた。
- ・ そういった背景もあり、2014 年に「もっと遊ぼうハマの海!」をスローガンにハマの海を想う会を作った。
- ・ 横浜市港湾局が「みなとみどりサポーター」としてボランティア活動を支援しており、清掃活動などを実施。ゴミ拾いだけでは勿体ないと、子供たちと自然活動をししたりした。
- ・ その頃から幸ヶ谷小学校との付き合いも始まった。
- ・ 養老孟司著「子どもが心配」にも、「子どもたちのあそび場が次々に消失」し、「子どもは本来『自然』に近い存在」で、都市化が進んだ現代の子どもを心配している」と書いてある。
- ・ 今の子どもたちは、
 - 1) 時間がない。授業が 15 時半ごろに終わって帰るのが 16 時くらいになり、この時期だとすぐ暗くなるので外で遊べない。また、スマホを触る時間が長い。
 - 2) 遊び場がない。公園で遊んでいても近所からうるさい、と文句が出る。

3) 仲間がない。塾や習い事などで忙しい。皆でにぎやかに遊びまわるところがないので仲間もできづらい。子ども同士の関係が希薄。ゆとりがない子供たちには、余白が必要と常々感じている。

- ・ 2013 年日本学術会議・提言より。

「子どもの運動能力、体力は昭和 60 年頃以降低下」「肥満や糖尿病などのリスク」「不登校、引きこもり等精神的にも困難な状況」「子どもの成育状況は極めて深刻」「孤独だと感じている」「生活時間の分断化」「メディアに取られる時間の増大」「外で過ごす時間の減少」「触れ合いの時間の減少」「生活時間の乱れ」「待つ時間・休む時間の喪失」「非日常的な体験の時間の加速度的減少」「成育時間の改善は極めて重要」

- ・ SNS などに取りられている時間、高校生で 6 時間、中学生で 4 時間、小学生でも 4 時間弱。外遊びよりバーチャルなものの時間を取られている。
- ・ 酷暑における熱中症で、外遊びが危険な数値になると外で遊ばせられない。異常気象の現状がある。
- ・ 横浜市立小学校の海・自然との関わりあい。宿泊体験学習（横浜市野島、西伊豆、三浦市、千葉県大房岬、静岡県三保など）、修学旅行（6 年生：片品村など）、校外学習（横浜技調潮彩の渚、高島水際線公園など）。



2) 釣りを通じた環境学習とは

- ・ 日本釣振興会で 2021 年から実施している釣りを通じて環境を知ってもらう学習を、小学校の正規の授業の中でやっている。
- ・ 釣りが目的?→釣りはあくまで手段。釣りをを使って身近な場所の海、川の生き物を知ってもらう。
- ・ ①事前学習:校長、学年の担任にヒアリング。関心事、困っていることを事前調査 ②座学(教室や体育館で):総合的な学習の授業の中で、魚の話、横浜の海の歴史の話、海ごみの話(海の現状を伝える)、子どもたちにやってもらいたいアクションのヒントを伝える。③フィールドワーク:実際に近くにある海に行き、釣りをして生き物を調査する。
- ・ 国交省の横浜技調(人工干潟「潮彩の渚」)、臨港パークの「潮入の池」も子どもたちの(ハゼ)釣りのフィールドワークの場所として活用。
- ・ 日釣振の方が釣りの手ほどきをしてくれたり。引率者が担任一人だと特に暑い時期など難しいが、幸ヶ谷小には「共育倶楽部」というボランティアの団体があり、保護者の方、地域の方にお手伝いをお願いできている。
- ・ 1クラス 15 人×2回×4 クラスで技調の職員の方から関東地整の職業紹介などもしていただき、担い手育成にもなっていると感じる。

3) 学校や保護者の感想

- ・ 今まで生まれて 9 年間生き物に触ったことがなかったが、今回参加して興味を持ったとか、触れるのが怖かったが、活動してみてもすごく楽しかったというような感想が子供たちから聞いた。
- ・ 何度もフィールドに足を運んで自然にどっぷりつかることが、子どもたちの教育の本質につながる。
- ・ 学習の中で釣りができるのは通常考えられないことだが、総合的な学習という授業の中で実現できている。次年度以降も継続していければ。
- ・ SDGs は 14「海の豊かさを守る」の話になりがちだが、「森里川海」「ゴミ問題:作る責任、使う責任」「温暖化」「生活排水、トイレ」「食育」「民間団体とのパートナーシップ」「平和」などの話にも広げられる。

4) 身近な自然をもっと子供たちへ

- ・ 神奈川に加えて、東京、埼玉でも日釣振の活動をしている。非日常=体験活動が大事と先生方にも理解い

ただいている。

- ・ 子どもたちがリアルを感じる活動にしたい。実際に体験したことが大人になってもつながっていく。海の活動、楽しい活動をしたから、海が汚れていくことや生物の生息環境を自分ごととしてとらえられるので、そういった体験を大事にしていきたい。

5) 仲間大募集

- ・ 座学の先生募集。フィールドワークをする場合は地域の方に参加してもらっている。フィールドワークのスタッフも増やしていきたい。
- ・ 実施校の1キロ圏内に海や川、池などがある。学校で展開しているが、子どもたちがもっと遊べるフィールドを増やす活動もしたい。
- ・ 生き物を増やす活動もしたい。三浦では漁師と産卵する場所(産卵礁)をつくる活動もしている。
- ・ ワークライフバランスと言われているが、ライフが先。ライフワークをバランスよくしていきたい。皆さんと一緒に体験活動をやっていききたい。皆さんと遊びたい。ぜひご協力をお願いします。

Q&A

Q: マイクロプラスチックを技調の干潟で教えていて、身近に落ちているペットボトルの数を調べたことがあった。子どもたちは、きっかけさえあれば学ぶと感じた。(感想)

Q: ハマ海会の釣り大会で魚を釣っていて、併せてごみを拾っていたら賞をもらったと聞いたが。

A: ハマ海会でハマ海杯というボートでのスズキ釣り大会を開催していた。釣り大会の合間にクリーンアップ活動をしていたところ、南本牧の方で、メンバーが一生涯懸命ごみを拾っていたら、港湾局の方に声を掛けられ、これがきっかけでハマ海会のことを知っていただき、これまでの活動を紹介したところ国交省から海事功労賞をいただいた。

■情報提供②「アジア初の国際環境認証『ブルーフラッグ』取得への挑戦」

講師: NPO 法人湘南ビジョン研究所 理事長 片山清宏様

1) 自己紹介

- ・ 自分は海が本当に好きで、湘南の江ノ島の近くで生まれ育った。小さい頃から海に行って遊んでいた。
- ・ 高校1年の夏にサーフィンに会い、300日以上海に行き、毎朝4時からサーフィンをしてから学校に行っていた。プロサーファーを目指していた。
- ・ 毎日海に行くので、ビーチが自分の庭に感じていたら、ごみが気になり出してビーチクリーンを始めた。
- ・ 一人じゃ無理というので仲間を集めてビーチクリーンを続けていた。ダイビングで海底清掃もしていた。
- ・ 20年間、ずっと続けてきたが、ある時、統計・グラフを見て、ショックを受けた。ごみが減っておらず、むしろ増えていた。そこからごみの研究に入った。

2) 海ごみ問題の解決

- ・ 海ごみの70%は川から来る。川のごみは街から来る。街から出たごみが川を經由して海に来続けるのでなくならない。
- ・ 川・街地域全体で考えないといけない。
- ・ いちサーファーだけでは難しく、行政・企業・市民団体みんなが一体となった取り組みが必要。

→海辺の国際環境認証「ブルーフラッグ」を知る。



3) ブルーフラッグ認証とは

- ・ NGO「FEE」が実施。
- ・ ビーチの基準は 33 個あり、全部クリアすると認証されてブルーフラッグがビーチに立てられる。
- ・ 「きれいで安全安心なビーチ」海のブランド化、価値が上がり、世界中から観光客が訪れ、地域にお金も落ちる。
- ・ 世界で 51 か国、5121 か所でブルーフラッグが取られている。(2024.8 現在)
- ・ 2010 年の当時はアジアにはブルーフラッグが1つもなかった。
- ・ 当時勤めていた市役所を辞めて、アジア初のブルーフラッグ認証を湘南で取得し海ごみ問題を解決すべく NPO を一人で立ち上げる。
- ・ 大磯市、平塚市、藤沢市、鎌倉市、…10 自治体の全市長に直談判に行くがすべて断られる。

4) 海底清掃でメディアに取り上げられる

- ・ 2011 年。江ノ島にメディアを呼びブルーフラッグ認証を目指すため、まず漁業組合の組合長に海底清掃の許可をもらいに行くも断られる。
- ・ 組合長のご自宅に伺い再度アタックするも断られるが、3 日間通ってようやく賛成派になってもらう。日釣振との共催で海底清掃を開催。ブルーフラッグ認証の原点に。

5) 2016 年由比ヶ浜海水浴場でアジア初のブルーフラッグ認証取得

- ・ 水質測定、ビーチクリーン、ごみ箱の設置、ごみの分別など、リサイクル、ライフセーバーと協力した安全管理体制の構築、バリアフリーなど、各基準を満たすべく取り組みを進める。
- ・ 由比ヶ浜ののち、2021 年には片瀬西浜・鵜沼海水浴場でもブルーフラッグ認証を取得。
- ・ 日本のブルーフラッグは現在全国 14 か所に広がる。

6) 若者の海離れと人づくり

- ・ 海ごみ問題を解決するため、市民や子供にすそ野を広げるべく市民大学「湘南 VISION 大学」を2018年に開校。
- ・ 「湘南の海をキャンパスに」教室は海・ビーチ。目的は、普段あまり海に来ない、あまり海に関心がない人に海に来てもらうこと。
- ・ ビーチヨガなどを開催。東京にいる20代の働く女性をターゲットに。暑い、日焼けする、ベタベタする、ごみがありやだということで普段ほとんど海に来ない人たち。
- ・ コンセプトは「海をもっと楽しもう!」。子どもたちを含めて、まず海を楽しんでもらい、海を好きになってもらい、海を好きになった人は、海を「守ろう」とする。その後海の環境活動に参加してもらうように。
- ・ ビーチナイトピクニック。夕方から、サンセット時にランタンを焚いて。「夜のビーチを楽しむ」

7) 学校への出張授業・企業研修

- ・ 企業とたくさん連携。7年間で349講座を開催、1万人以上の受講生を得る。

8) 数々の受賞履歴

- ・ 2022年テレビ朝日で「ブルーフラッグ認証」を取り上げてもらう。
- ・ 2020年「かながわ地球環境賞」受賞
- ・ 2024年「環境大臣賞」受賞

9) 今後の展望

- ・ 日本全国で100か所のブルーフラッグビーチを誕生させて、日本の素晴らしい海を次世代へ。
- ・ ブルーフラッグで海を綺麗にし、海のブランドを向上させ、誘客することにより、地域全体が潤い、まちおこしにつながる。持続可能なまちづくりを目指し、日本をよりよくしたい。

Q&A

Q. 20年間ごみが減ってなかったという統計に驚いた。統計はどこが？

A. 神奈川美化財団、神奈川県、市町村が出資している財団による。

Q. 県全体？

A. 150キロの海岸。神奈川県全体。

ビーチクリーン活動がどんどん増えていた現状があったのにごみが減っていなかった。

Q. ①川ごみを減らす方法はどんなことがあるか。②認証を取得する時に一番苦労した基準は何か。

A. ①川ごみは街から出るので大変な問題。河川敷にまずごみが溜まり、雨が降ると流れるので、河川敷を普段からいかに綺麗にしておくかが課題。リバークリーン、リバーサイドクリーンと言う、河川敷、川に入る近くの道路を綺麗にする活動をいろいろな団体と組んで実施。(自治体ごと)また学校に行き、啓発活動も行った。

②20回水質調査会社に試料を提出し合格する必要があるが水質は大変だが、自分は合意形成が一番大変だった。市長、各関連団体が会議体を作って全体で合意することが必要。利害関係者が多く、例えば「海の家」にとってはごみの分別などコスト負担が増える。収入が減ることは大儀があっても説得が大変だった。綺麗で安心・安全な海にはゆくゆくは企業協賛が付くので結果的に収入も上がるはず、メディアに出て宣伝もできるので誘客にもつながると説得。それぞれに丁寧に説明し、説得するのに5年かかった。



■情報提供③「横浜港の豊かな海づくり」

講師:横浜市港湾局政策調整部新本牧事業推進課 課長補佐 谷政史様

1) 横浜市の概要

- ・ 人口は377万人で政令指定都市で1位。
- ・ 横浜といえば海・港のイメージ。

2) 横浜市港湾局の主な事業

- ・ ①国際競争力のある港 ②観光と賑わいの港 ③安全・安心で環境にやさしい港
- ・ ③は、「豊かな海づくり」として、生物多様性の保全、環境行動の実施、海の環境改善、横浜の海と触れられる場の創出を目指すとともに脱炭素に向けてブルーカーボンの拡大を進めている。

3) 豊かな海づくりの取り組み ①生物共生型護岸(新本牧ふ頭)

- ・ ロジスティクス拠点の整備、水深の深い高規格ターミナルの整備のため新本牧ふ頭を建設中。建設発生土の受け入れ場所の確保も担う。現在、岸壁・護岸の整備と埋立を行っている。生物共生型護岸を採用。
- ・ 生物共生型護岸とは、多様な生物の生息場所となる構造を取り入れた護岸で、完成後は多くの生物の棲み家となる。
- ・ ケーソンは13.5m×25.0m 重さは1600トン。表面に波を穏やかにするスリットを設けて、中は空洞になっており、遊室の高さ・深さを変え、そこに自然石を敷き詰め、海藻類や海生生物の生息に適した自然の岩礁を再現している。

- ・ 光が届くところで、-4mの深さを設定。その他、-2.5m、-1.0mの深さをそれぞれ設定。
- ・ 令和3年度に設置。令和5年度の生物調査ではムラサキイガイ、イシガニ、ナマコなど生物生息場の機能が確認できた。

4) 豊かな海づくりの取り組み ①生物共生型護岸(金沢水際線緑地)

- ・ 2019年9月の台風15号で背後の工業団地に甚大な被害があり、2.7kmの護岸のうち800mが倒壊した。
- ・ 再度の甚大な災害防止のため、護岸を3mかさ上げ、前面に直立消波ブロックを整備。道路との境界に防潮堤を設置した。
- ・ 直立消波ブロックには防災の役割に加えて、生物・藻類が着床する効果がある。
- ・ 現在、釣りもできる遊歩道として24時間開放している。特に土日は昼も夜もにぎわう。アミメハギ、カサゴなど魚が棲み着く。



5) 豊かな海づくりの取り組み ②藻場・浅場

- ・ 藻場・浅場を整備することにより、アマモや貝類等が生息することで水質改善効果、稚魚育成、産卵の場となる他、ブルーカーボンとして脱炭素化の推進に寄与する。
- ・ 横浜ベイサイドマリーナでは市民・企業・NPO など多様な主体と協働してアマモ場再生に取り組んでおり、平成25年から10ヘクタールのアマモ場を再生。多くの生き物を育てている。横浜市としてもこのような取り組みを後押ししていきたい。
- ・ 山下公園前では平成25年~30年の期間、横浜市とJFEスチール(株)との協働で鉄鋼スラグを活用した生物付着基盤の設置や砂の投入による浅場造成を行い、現在もモニタリングを続けている。ムラサキイガイなどの2枚貝の着床など周辺海域の水質浄化に寄与している。
- ・ 臨港パーク・潮入の池は元タポンプで海水を流す池だったが、機械の故障により立ち入り禁止になっていた。臨港パークで砂浜造成の計画が持ち上がり、その実験も兼ねて潮入りの池の水路に砂を投入し、実験的に砂浜を造成した。柵を作り一般の市民も水辺に触れ合える場所となっている。整備後は釣りや生き物観察、漂着ごみの調査など、小学校の総合学習などでも活用されている。

6) 豊かな海づくりの取り組み ③ワカメ繁茂の実証実験

- ・ 横浜市の140キロある水際線、海岸線を活かす取り組み。新港ふ頭と整備中の新本牧ふ頭で実施。
- ・ 直立護岸にワカメを繁茂させる実証実験。直立護岸にワカメの種糸を付けたロープを設置して胞子の着生を目指す実験。昨年度冬に設置して1年が経過。食害等の影響あり。
- ・ 雌株から出た胞子が周辺の護岸や岩礁に着生するか、モニタリングを実施中。今年度はさらに、食害防止ネットの設置や、新たに設置箇所を増やすことで実証実験を進めている。

7) おさかなの街づくりの取り組み

- ・ コンブの種付け体験イベント。12月8日(日)金沢漁港にて実施。幸海ヒーローズ主催、横浜市漁業協同組合金沢支所、横浜市スポーツ協会共催、金沢区役所が後援。
- ・ 環境活動の認知度向上、コンブ・海藻のCO2吸収量の理解を広げる目的で開催する。

Q. 金沢の写真で護岸から釣りをしているが、背後は工業団地。周辺住民からの反対派はなかったか。

A.元々釣ができる場所。ごみの不法投棄、違法駐車が問題だった。今回、直立の消波ブロックを設置し、その上部を新たに遊歩道として整備し、その背後に新たに駐車場をつくった。民間事業者がこの遊歩道と駐車場を一体的に運営してもらう他、その土地使用料により遊歩道周辺の清掃を定期的に行うなど、従前の課題解決を図り、地元住民に釣り場解放に対して理解していただいた。



■情報提供④「横浜 SUP 倶楽部の活動について」

講師:横浜 SUP 倶楽部 代表 柿澤寛様

1) SUP に出会ったきっかけ

- ・ 学生時代はサッカーに励み大学時代まで続けた。鍼灸マッサージに通いながらトレーナーを目指す。1991年、インターコンチネンタルホテルにトレーナーとして配属、10年務める。
- ・ 横浜、川崎、根岸を中心に東京湾を走り回り、趣味が高じて遊漁船、ガイド船でシーバスガイドに。
- ・ 釣り、ウィンドサーフィンを続けていたが、2012年頃、海外のYoutubeでSUP (Stand Up Paddleboard)に出会い、ヨーロッパ、北米では都市部でSUPをしており、横浜でも遊べるのではと2013年SUP倶楽部を立ち上げる。メンバーが当時15人、今は50人ほどいる。
- ・ 大岡川に栈橋(桜栈橋)があり、川幅も狭いので大きな船も入れないためSUPに向いているのではと。
- ・ 2013年当時、SUPに乗っていると都市部なので「何をやっているのか」よく聞かれたが、最近は広がったので、「SUPは楽しい?」と聞かれる機会が増えた。

2) 川ごみの問題とSUP

- ・ 先ほど片山さんから海ごみの7割が川から来るとあったが、一つはレジ袋などの川ごみ問題があった。
- ・ はじめはさくら栈橋の岸壁に牡蠣がついていたので月一で整備をしていて、そのうち人が増えてきたので周りの川ごみも拾おうと始めた。
- ・ 「あそび場をつくる」意識でやっていたリバークリーン活動が新聞にも取り上げられ感謝された。
- ・ リバーサイドクリーンなど大岡川の周りのごみを拾う団体も増えてきて、川ごみは減ったと実感している。
- ・ いろいろな団体が参加してリバークリーンを12年続けている。
- ・ SDGsなども隆盛になり、JTB、マニユライフ、B&Gなど企業や団体の参加も増えた。
- ・ 今ではSUP体験のうち、環境関係で2割が団体で来てくれる。

3) 安全航行の呼びかけ

- ・ 水上バイクとSUPで同じ水域を利用する上での問題もある。
- ・ ボートショーで水上バイクの関係者に声掛けしたところ、同じく状況を問題視していた。共同で実証実験を実施。大岡川では事故が減った。
- ・ 川で落水者がいた時を想定して消防と共同して水上訓練も実施。
- ・ 7年前に水上バイクに対して「SUPが見えたら最徐行」の幟を設置。

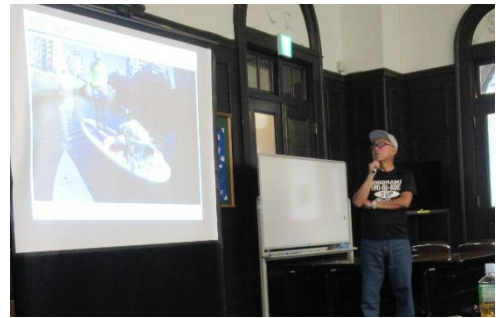
4) 横浜各所でのSUP

- ・ 横浜のすべての水辺に一度は行くことを目標としている。
- ・ 海をつくる会の山下公園での海底清掃に参加する形で、一昨年氷川丸の前でSUPでクリーンアップを実施した。
- ・ 10年前国交省の「東京湾大感謝祭」のイベント内でインナーハーバーでSUPを実施。
- ・ 大岡川は全国で2番目くらいに桜を見に来る地域。SUPツアーを実施しているが、3人に1人はインストラクターが付く形で安全に留意して実施している。
- ・ 年末に行うサントクルーズは2名で始めたが、20人、40人、50人と増えていき、今では100人近くがサ

ンタの格好で参加している。水面に目を向けてもらう意味でも継続している。

5) SUP レースを行う上での地元との調整

- ・ SUP マラソンという 22 キロ漕ぐレースも5・6年前から実施。
- ・ 大会時は、はしけ組合、屋形船組合など、動力船を運航しているところに一通り挨拶に行く。直接顔を合わせることが大事。



6) 大岡川という活動フィールド

- ・ 狭い、汚い、臭いイメージの大岡川だが、水質調査の結果豊かな海であることがわかる。ネガティブなイメージから、都市部から近い、家から近い場所で毎日のように活動できることのメリットを感じ、最初からあるものではなく、自分たちで遊び場を作っていくことにつながる。
- ・ イベントを行う際は、必ずリバークリーンを行う。流れているものをそのままにしておくのが気が付かない。自分たちのように毎日川で活動をしていると、横浜港のものすごい量のごみに気づく。リバークリーンをすることではごみの量はそんなに減らないが、敢てごみ拾いをする事で他の団体にも気づいてもらいごみを拾ってもらえる。
- ・ 大岡川は神奈川県管轄。港湾はごみ拾いしているが、川は指定業者がない。アピールのためにもごみ拾いしている。

7) よこはま運河チャレンジ

- ・ 明日、11/17には「よこはま運河チャレンジ」が大岡川で開催、100人ほどが参加予定で、CNACもEポートで参加するのでぜひ参加を。

Q&A

Q. マリンアクティビティの調整はどこかが中心になって行っているのか、お互い話し合っているのか。イベント時、釣り、水上バイクなど。

A. 基本的には足を運んで会って話をする。年間30回、40回顔を出している。10年続けているので、顔を知られてもらいスムーズにはなってきた。

Q. SUP フィッシングが流行ったが、釣り大好き柿澤さんは横浜でなぜSUP フィッシングをしないのか。

A. 全国を回っているがSUPで釣りに行って帰ってこない案件が多くなっている。事故が増えるのがわかっているので11年間自粛している。

■ パネルディスカッション

コーディネーター：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 理事 小原 朋尚 ((公財) 笹川平和財団海洋政策研究所)

1) コーディネーター小原理事紹介

- ・ マリンスポーツを使った野外教育、冒険教育の分野で、ヨット、スキューバダイビング、シーカヤックなど、様々な海のアクティビティを使った分野で野外教育をしている。
- ・ 今年5月から笹川平和財団勤務。団体を支援する業務に携わる。



2) コーディネーターから講師への問いかけ

①海から学んだこと

(講師:吉野)

- ・ ハマの海を想う会で海への感謝を込めてごみ拾いを行っている。また、ごみ拾いだけではつまらないので、釣り大会や生物観察などを行っている。
- ・ 海が好きで、自然を感じることができる。船に乗るようになってからは、強風で流されたり危険もありつつ、自然のすごさを学んでいる。
- ・ 一方、生き物と触れ合ったり。素晴らしい景色を見れたり。
- ・ 釣りは横浜の都市部でも自然を感じることができる。

(講師:高根)

- ・ 海と関わると子どもたちが変わっていく。生き生きとしていく姿を見ることができるのが教職をやっているとよかったと感じること。
- ・ 海の香りがすごく好きで、遠くから海の香りがすると歩いたり走ったりしたいと感じる。

(講師:片山)

- ・ サーフィンをやっていて、サーフンは波に乗る、うねりが数千キロ先から来るが、波が後ろからぐっとくるときに地球のパワーを感じる。板が滑り出す瞬間が最高で、地球のエネルギー、自然の偉大さを学んだ。人間はすごく小さな存在で自然の偉大さでいなされていることを学んだ。

(講師:谷)

- ・ 海浴いで育ち、海水浴の時にアマモがたくさん生えていて、足に絡みつくし、困っていたが、こういう仕事をしなくて藻場の重要性もわかってきた。
- ・ 海浴いで育ったが海水浴、釣りくらいしかしてこなかったのも、スキューバダイビングや SUP もやってみよう。

(講師:柿澤)

- ・ 海の怖さ、力の強さも感じる。レースでは潮に流されてレスキューされたことも。

②一番の“楽しさ”“面白いところ”、活動のおすすめポイント

(講師:柿澤)

- ・ SUP は楽しい。教えるシステムを作りたい。一方で、自分は遊び方を教わってなくて、自分で考えて遊んでいた。教えることが大事な一方で、大人が真剣に夢中で遊んでいる姿を子どもに見せることも大事。
→セーリングでも同様の問題がある。親が楽しんでいる姿を子どもに見せることは大事と自分も感じている。

(講師:谷)

- ・ 潮入りの池に砂を入れたことで子どもたちが総合の学習で授業で来て海辺で楽しんでいる姿を見られるのは嬉しい。公務員として、(共生型)護岸、アマモ場などの場を作った上で、潮入りの池のようにそれらを見てもらう場をつくるのが大切だと感じた。皆さんに喜んでいただいたり、教育につながることを、まだ先になるかもしれないがやっていきたい。
→横浜港はブルーカーボン発祥の地。環境再生活動。また、港と言えば横浜。みなとまちづくりも含めて進めていっていただきたい。(小原)



(講師:片山)

- ・ 海の楽しみ方はたくさんある。料理+海=海鮮を楽しむこともあるし、海を学ぶことも楽しい。ビーチでバーベキューも良いし、あるいは景観、写真を撮ってInstagramに載せるの楽しみ方もいい。海の夜景を見ながらお酒を飲むのもいい。多様な海の楽しみ方をいかに提供できるか。
- ・ 海水浴場は真夏だけだが、日中に来てと言っても泳ぎにこない。海水浴場がどんどん閉鎖されているが、海の楽しさをいかに提供できるか、がポイントで、いろいろなメニューを揃えることが重要と考える。



(講師:高根)

- ・ 子どもたちの楽しさを考えた時に、見るだけでなく触ってみること。体験すること。
- ・ 穴の中に入っているカニをなんとか出して手で触るとか。
- ・ 10月に潮入りの池で吉野さんと子どもたちとハゼ釣りをしたときに、釣ってそれを実際に食べる経験をする。美味しかったかは聞いていないが、釣った魚を食べたと聞いた。
- ・ 宿泊体験で地引網体験をして、そこで穫れた魚をバーベキューで食べると、魚が嫌いだった子も魚を好きになったりと聞く。大切なのではないかと考えている。
→海での非日常の体験がいい。(小原)

(講師:吉野)

- ・ ハマ海会のスローガンは「もっと遊ぼうハマの海!」。ハマ海会のメンバーもいろいろなメンバーがいる。
- ・ 仕事の関係で何をやっても楽しくない、と疲れてしまったメンバーがいた。仕事は遊びの延長で、もっと楽しんだ方がいいし、ワークライフバランスではなくライフワークバランスが大切。そういう気持ちでやった方がいいという話をしている。
- ・ 学校の先生も今忙しくて、なかなか時間がない。総合的な学習も実は難しく、先生方も取り組みに悩んでいる。
- ・ 先日もある小学校の先生から、総合的な学習が難しく悩んでいる、と相談があった。近くに海があるからと相談してきたが、何を頼めばいいのかもわからず困惑していた。学校の近くに海があること、そこには様々な生物が生息していることなどを伝え、そのことを授業で子どもたちに話すことになった。
- ・ 授業が終わった後、先生も腹落ちしたようで、子どもたちとこういう活動をしていきたいとなり、総合学習が進んでいくようになったことがあった。
- ・ 気楽にやろう、仕事も遊びと思えば楽しめる。先生も子どもたちと考え自由に総合学習を楽しんだほうがいい、と伝えている。
→学校の先生の総合の学習の時間の話があったが、5教科ではない、すべてとつながりのある教科であり、その他にも探求学習などもある。昨日ちょうど大分県別府市で九州地区の生活科と総合の学習の先生の研究集会があり参加してきたが、先生方が総合の時間に教えるのが一番面白い(子どもたちも)と言っていた。だけど、難しい、と。どう組み立てるか。そこに、海辺の体験を総合的な学習に導入してほしいと我々は活動をしている。(小原)

③子どもたちに対するメッセージ

(講師:吉野)

- ・ 子どもにはとにかく遊んでください、と伝えている。総合学習でも「もっと遊ぼう」と伝えている。海の話をしたら学校の外に行き、海辺で生き物を見つけられる。「遊びに行こう。勉強じゃないから」と言っている、実はそれが学びにつながっている。とにかく「もっと遊ぼう」と子どもたちには伝えている。
→CNACでは海辺のプログラムをまとめた「海遊びレシピ」を



作っている。遊びの部分でやりながら教育のエッセンスもある。(小原)

(講師:高根)

- ・ 子どもは遊んでいるつもりだが実はそれが学習になっている。そこは先生の力量次第。
- ・ 吉野さんのところに相談に行ったのは初任者。毎日の授業のため他の教科の準備もしないといけない。運動会等もある。その中で総合を進めないといけないというので吉野さんに委ねた。リアルな体験をプロデュースすることが先生に求められている。



(講師:谷)

- ・ 子どもたちに自分たちの仕事の説明をするとき、子どもたちには言葉が難しくてわかりづらい。
- ・ 横浜港にスカイウォークというところがあり、そこから物流の大きな倉庫やクレーンが見える。ベイブリッジの下には客船も通っている。話を聞くだけではなく、実際に現場でそれらを見て体感してもらい、港湾・物流の見識を広めてほしい。
→港湾、特に横浜港はなかなか人が入れない。ぜひ、直接現場で見て触れてほしい。体験学習として大事。

(小原)

(講師:柿澤)

- ・ SUP の仕事で全国を回っているが、自分たちは詰めすぎたり考えたりしてしまうが、ACA (American Canoe Association) の人たちは子どもたちには敢えて思い通りにさせて教えすぎない。大人には基本から教える。決まったことを教えるのではなく、「何でそうなるの?」と子どもたちに聞いて考えを促すようにしている。
→教えすぎない。失敗しても失敗から学ぶ。教えすぎないから逆にできる。(小原)

(講師:片山)

- ・ 小学校や中学校の総合学習の授業を湘南 VISION 大学で受け入れることがあるが、大切にしていることが2つある。
- ・ ①現場で体感してもらうこと。例えば海ごみ問題。知識はある。一番ごみがたまっているところに連れていきごみ拾いをして体感してもらう。
- ・ ②自分の頭で考えて解決のために一つでも、小さくてもいいので行動に移してほしい、と伝えている。授業の感想はいらないので自分でやったことを3か月後に教えてほしいと伝えている。
→体験しただけ、体験で終わってしまうことも良く見られるが、体験をして何を見て何を学んだか、意識を変えて行動させる。とても大切なこと。(小原)

③活動する上での課題について ヒト・モノ・カネ 行政 安全管理の観点から

(講師:吉野)

- ・ 課題は人。次の世代をどう確保し育てていくのかが大きな課題。
- ・ 日釣振は全国に釣りを広げようとやっている。大谷選手がグローブを1校ごとに3つ、全国で去年配ったが、野球界に影響が大きい。
- ・ ハマ海会は以前はよく親御さんが来てくれていたが、最近は来なくなった。そこが悩ましい。

(講師:高根)

- ・ お金の問題がある。以前は笹川平和財団のパイオニアスクールプログラムで助成をいただいていた。
- ・ 幸ヶ谷小学校は海水槽があり、子どもたちが生き物を育てている。費用がかかりその確保が課題。
- ・ 異常気象の暑さが子どもたちの活動で大きな課題。5月・9月がとんでもなく暑い。これからもっと熱くなると思う。外に実際



に体験する期間が冬くらいになるのでは。

→CNAC でも、海に入ったら一緒ではないか、という話が出たが、学校現場ではなかなか難しいと思う。

(小原)

(講師:片山)

- ・ 業界としての課題でいうと、今全国に千箇所ほどある海水浴場がどんどん閉鎖されていることにとても危機感を持っている。
- ・ 海の家は採算が取れずつぶれていく。ライフセーバーを雇うお金がなく、海水浴場が閉鎖される。という悪循環になっている。
- ・ 解決策の提案として、狭いエリアに海水浴に来てくださいというのはもう難しいので、周りの施設と連携することを考えたい。
- ・ 例えば、江ノ島だと水族館に来てビーチ、とか、お洒落なレストランに来たついでにビーチなど。
- ・ 道の駅、温泉、キャンプ場、BBQ場など、地域一体で連携してどうやって海を楽しむ人を誘客するかが大切。
- ・ もう一つ。日本の海水浴場は開設は長くて1か月間。異常気象もあるが、春でも海に入れるし、11月でも海に入れる。通年でどう海を楽しむか、の発想を日本に広げていきたい。
- ・ ビーチのイベントは春・秋の方が涼しく、分散することで車の渋滞もなくいい。通年でお金が地域に落ちればいいし、広く、面で海水浴客を受け入れて、海水浴場の消滅を防ぎたい。
→自分も「海開き」という言葉に違和感を感じる。なぜ、この暑い夏に海に入らないといけないのか。海と言えば夏が一般のイメージだが、セーリングやヨットも夏には乗らない。暑すぎるし風もない。ダイビングもどちらかというと秋から冬、水が澄んだシーズンにやる。海の通年利用の楽しみ方を、安全面も含めて発信していきたい。(小原)

(講師:谷)

- ・ 行政では、前例がないと「難しい」となりがち。組織の中で意思決定する中で、様々な確認を取る必要がある。日常業務が滞ることになるので、「前例がない」という結論になると思う。
- ・ 良い相談を持ってきてもらった時に、どう解決するか。なかなか難しい問題であり、課題だと思う。

(講師:柿澤)

- ・ 個人的には人の問題。合意を取ること。
- ・ 友達じゃないけど仲間という関係がいい。意思のある個人のつながり。
- ・ 設立から11年が経ったが、前は今までできなかったこともできるようになったりすることが楽しかったが、今は新しいことを提案してもなかなか話が進まなかったりする。
- ・ 横浜でやると目立つ。いいこともあるが、そんなことを、って人も出てくる。制約をかけたりすることで恨まれて壁に名前が書かれたこともある。

④思い描くハマの海の未来

(講師:柿澤)

- ・ 臨港パークのビーチの話はいい。それまで2年間頑張りたい。
- ・ 保安庁の会議で話した時に日本の実情の話をしたら驚かれた。
- ・ コロナの時は、アウトドア系のビジネスであまり影響がなかった。都市部でヨガをしたり、臨港パークのところではランニングがされていたり。横浜のあそび場、アウトドアスポーツを推していきたい。

(講師:谷)

- ・ 横浜市で、3本の柱の話をしたが、横浜市の経済活動の大半は港で行われている。そこで勤める人がいて、いろいろなアイデアが生まれる。
- ・ 今の担当業務である豊かな海づくりとして、各種整備を進めていき、作ることに、そこを教育の場として活用することを推し進めたい。



- ・ 横浜市役所には港湾に対する思い入れが深い人が多い。自分としてはブルーカーボン、CO2吸収と、そこを教育の場として使うことを考えていきたい。

(講師:片山)

- ・ 2030年までにブルーフラッグビーチを100か所作りたい。
- ・ その先には、日本の千か所の海水浴場のブルーフラッグを目指し、日本の多様な海の文化を守り、次の世代につなげていきたい。
- ・ 海はつながっている。様々な関係者の利害があるが、海に関わる人は心がつながっていると感じる。連携して推し進められることが強み。

(講師:高根)

- ・ 臨港パーク、高島水際線公園で20年後、30年後に今以上にハゼが釣れて、大人・子どもが、まちの人が釣りをし、釣り糸を垂れているのが見れたら。

(講師:吉野)

- ・ いつでも、どこでも、誰でも海と楽しめる、海と遊べるようになればいい。
- ・ 昔は、結構おおらかで、いろいろなところで釣りができた。今は釣りができる場所がものすごく減っている。海から市民を遠ざけているような状況なので、おおらかな時代に戻ってほしい。
- ・ 今はデジタル化が進展し、ゼロかイチで、あるいは〇か×で様々なことが判断されている。余白や遊びの部分が希薄になり、欧米化して日本の△の部分越来越少くなってきている。日本人は曖昧と言われるがそこが日本人のすごく良いところだと思う。
- ・ 行政も様々な立場があると思うが、日本の△の部分は世界で見ても素晴らしいことなので、そういう余白や遊びのある海や街づくりを目指してほしい。社会全体でそれを見守るような社会になるといい。

Q&A

Q. NPO等の団体活動では、何をすることもお金がかかるが、活動を継続するために苦勞されてきていると思う。海洋教育スクールプログラムなどもあるが、ご紹介いただけることがもしあれば。

谷さんには、横浜市の環境系の事業で、何か工夫をされているところ、NPOとの連携の話でエピソードなどがあれば伺いたい。

A.

- ・ ハマ海会は任意団体で物好きな人が集まっているのでそんなにお金で困ることはない。ハマ海会ができた頃の頃は助成金を取っていたが大変なので今は取っていない。日釣振は活動資金がある。(吉野)
- ・ 学校ではPTAの方々が援助してくれたりもする。学校で使える費目は決まっているのでPTAの協力が有難い。(高根)
- ・ NPO運営で最大の課題の一つが資金確保。助成金は単発で限られる。今の収入源は2つ。申請書の補助など、ブルーフラッグ認定のコンサルを自治体から請けている。もう一つ、大手企業の研修の受け入れ(100人規模)が収入源になる。企業とタイアップして商品開発もしている。彼らとしてはNPOと組むことでCSRになる。学校現場ではお金をいただけないのでそれらの収入を回して全体で収支を合わせている。(片山)
- ・ 横浜SUP倶楽部を始めるときはヨーロッパのサッカーチームを想定し自走を目指した。SUPにはスクールとイベントがあるが、昨今、環境のことが結構取り上げられており、我々の活動と重なるので、推していこうと考えている。環境学習で参加者に企業研修などで伝えることで財源になる。人もそうだが継続する活動にするためには財源が必要。(柿澤)
- ・ 予算の件で、財政が厳しい中で、昨年予算が付いたから今年もつくということはない。こういった形で予算を付けるかという課題がある。実証実験でも、環境教育につなげることで予算を確保できるよう思慮している。(谷)
- ・ NPOの方は仕事の場ではあまりつながることはないが、浅場を作りアマモを植えるときには力をお借りすることになると思



う。ご案内した金沢文庫のコンブ養殖の件は、紹介でつながった。こういう場で輪を広げて仕事につなげていければと思う。(谷)

3) まとめ(コーディネーター)

- ・ 楽しさ、遊びからどんどん海に関わる人口を増やしていきたい。会場にお越しいただいた皆さんも、大人が遊ばないと子どもも遊ばないので、皆さんも明日の運河チャレンジ含めて横浜で遊んで帰ってほしい。

■閉会挨拶

スピーカー:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 大塚 英治

本日のタイトル「楽しさがつなぐハマの海の未来」で、今年フォーラムは19回目になった。19年前は2007年で、日本の海洋行政にとっては海洋基本法が施行された記念すべき年。

海洋開発利用と環境保全の調和を図ること目的として、広く国民に対する海の接し方や機会をつくることを基本法では謳っている。そうしてCNACも設立されて、ようやく19年を迎えた。

19回のうち、自分は17回フォーラムに参加している。紆余曲折ありながらここまで来た。

今日のタイトルで、「楽しさがつなぐ」は、CNACは安全な海の体験の場の提供として、アクティビティや体験学習のプログラムを作ってきた。当たり前、まずは安全第一。

「つなぐ」という意味では、今日のパネルディスカッションでも話されていた通り、楽しくないとつなげられない、と。自分も海好きとしては沁みる言葉で大切にしていきたい。

横浜で開催された、という意味では、恐らく、課題先進地区でありながら、課題解決先進地区でもある。非常に意義のあることだった。

「海の未来」、海水浴場開設期間の話があったが、業界自体の昭和から続く常識をそろそろ変えていかないといけない。海に来てお金を落としていただくことを海水浴でやるばかりでなく、もっと広い目で海水浴が楽しめるべきだし、アマモにしても漁港にしても港湾にしても、アマモ場を作りたいだけの人はいない。そこから得られる生態系サービスを楽しむことを目的にそういった体験活動が成されているので、そういった面でいうと、より良い社会、考え方のシフトチェンジが大切である。社会的インパクト評価という言葉が最近使われているが、地域コミュニティの理解や資金調達の中で恐らく有利になって来る時代がそろそろやって来るはず。

次回開催は、午前中の理事会で小樽で20周年をやるとなった。私は北海道小樽生まれ。皆さんにぜひ小樽に来てほしい。

最後になりますが、本日ご登壇いただいたパネラーの皆様、ご後援をいただきました国土交通省、横浜市港湾局、みなと総研の皆様に御礼を申し上げて終わりにしたいと思います。本日は皆様ありがとうございました。





参加者集合写真



2日目 オプションツアー(4枚目は柿澤様より)

(了)